わたしたちはその栄光を見た

ヨハネによる福音書　１：１－１８

司祭　ヨハネ 井田　泉

降誕後第１主日
2025 年 12 月 28 日

京都聖三一教会にて

「言(ことば)は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」ヨハネによる福音書 1:14

ヨハネ福音書は、クリスマスの出来事をこのように語っています。

「言は肉となった」

「言」とは神の言葉です。神はひとり超然としているのではなく、語りかける方です。これが聖書の伝える神です。

その神が「肉」となって、つまり人間の赤ちゃんになって、わたしたちの間に宿られた。わたしたち人間のひとりとなられた。血も涙も汗もある人間となられた。あり得ない、考えられないことです。しかしこれが聖書の福音です。神さまはわたしたちに対する愛のゆえに、そのことをなさった。わたしたちの重荷と悩みを担うために、わたしたちと同じになられた。その不思議な恵みの事実を、今日の福音書はわたしたちに知らせようと語りかけています。

「言(ことば)は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」

前半は「言が肉となって、わたしたちの間に宿られた」という**事実**を告げています。神のみ子の降誕の出来事を端的に伝えています。

後半はどうでしょうか。「わたしたちはその栄光を見た」。主語は「わたしたち」です。「わたしたち」とはこの福音書記者のヨハネとその周りの人びとのことでしょう。そのヨハネらが「見た」というのです。「わたしたちはその栄光を見た」。これは**証言**です。

ぼんやりとそんなふうに見えたとか、そんな気がする、というのではありません。はっきりと見た、目撃した。見たその事実、その出来事は、見た人たちを感動させ、心と体に浸透したのです。

「わたしたちはその栄光を見た」

クリスマスの出来事、神の言葉が人となられたという出来事の中に、神の力と命と愛が溢れ輝いている。その強く暖かい愛の光に照らされ、包まれた人びとは、こう口にせざるを得ませんでした。

「それは父の独り子としての栄光であって、恵みと真理とに満ちていた。」

神の恵みがここに溢れ、神の真理と真実がここに輝いている。それを見た以上は、それを人に語らずにはいられない。疑われても拒否されても、ためらったりひるんだりせずに、その目撃した出来事――愛に満ちたみ子イエス・キリストの輝きを――はっきりと伝えずにはおれない。たとえそのことで不利益をこうむったり馬鹿にされたり、迫害を受けたとしても、見た事実

を語る。経験した事柄を語る。これが証言です。言わば自分を賭けた、命を賭けたこの証言が教会を誕生させたのです。

今の 14 節の前に洗礼者ヨハネのことがこう語られていました。**「神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。」**1:6-7
彼は光として世に来られたイエスを証しする、証言する人だったのです。

この「証言」はわたしたちの信仰にとって非常に大切なことなのです。少しわたし自身のことを申します。今からちょうど 50 年前、聖職志願をして神学校に入った年、わたしは神様を見失いました。あれほどはっきりしていた神の存在がわからなくなった。聖書を読んでもかつてのような感動は起こらず、慰めも感じない。祈っても祈っても答えがない。それですから表向きはともかく、内的にはわたしの神学生時代は闇の時代でした。
そのようなときに、わたしがしがみついたのが「証言」ということでした。わたしには理解できなくても、わたしは感じなくても、聖書が、聖書の中の人間がこう語っている。証言している。その真偽を確かめたい。わかりたいと切に願ったのです。

たとえば天使ガブリエルのお告げを聞いたおとめマリアが、

親戚のエリサベトと出会ったとき、彼女の心から溢れ出た歌があります。「マリアの賛歌」です。以前は「聖なるおとめマリヤの頌」と言いました。

「わが心、主をあがめ　わが霊は、わが救い主なる神を喜びまつる」

マリアがこのように救い主なる神を喜び賛美して歌っている。わたしにはそのような喜びも賛美も、あえて言えば信仰もない。けれども、自分にはそれがない、わからないからと言って、マリアが偽りを言っているとか、そんなことはおかしいなどと言う資格がわたしにあるでしょうか。自分にはわからなくても、自分には感じられなくても、マリアが何を経験したのか、その深いところを知りたい。その喜び、その賛美を引き起こしたのが何であるのかを突き止めたい。一言で言えば、マリアの証言がほんとうであるかどうかを確かめたい。マリアだけではありません。ステパノが石に打たれて殉教するとき、「天が開いて、人の子が立っておられるのが見える」と言った。そのことを理解したい。パウロが復活のイエスに出会ったと言った。それを確かめたい。

極端に言えば、全聖書のあらゆる人びとの神との出会いを確かめ尽くすまでは、自分は死ぬことはできない、と思ったのです。

わたしの信仰の根拠はわたしの中にあるのではなくて、聖書

の証言にある。その証言が真実であれば、自分は生きることができる。そのように思い詰めていたのが、わたしの神学生時代でした。

神様はこの不信仰で愚かなわたしを憐れんでくださって、徐々にわたしを癒やしてくださいました。聖書の証言が真実であることを、少しずつ分からせてくださったのです。

神を見失ってもがいて、再び見出したとき、わたしの中にひとつの変化が起こっていました。「神様が分からない」という人の気持ちが自分のこととなった。その分からないところから一緒に神を見出そう、というふうになりました。

「言(ことば)は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」

ヨハネ福音書はわたしたちのために、大切な事実を証言してくれています。神がわたしたちのためになしてくださった恵みの事実は揺るがない。それは人を救う。たとえわたしたちがまだ、それを十分には理解していないとしても、ヨハネ福音書の証言はわたしたちに呼びかけつづけています。

「言(ことば)は肉となって、わたしたちの間に宿られた。わたしたちはその栄光を見た。」

わたしたちにもやがてそれが見えはじめます。わたしたちの間に宿られた神の子の栄光が、その愛の輝きがわたしたちを照

らし、わたしたちの中に浸透してきます。人となられたイエス・キリストが、ご自身をわたしたちに示してくださいます。

祈りましょう。

神様、わたしたちの目を開いて、ヨハネが証言したみ子の降誕の恵みに満ちた輝きを、わたしたちにも見させてください。わたしたちに聖霊を注いで、わたしたちもまた降誕の恵みを深く知るとともに、それを証言する者とならせてください。主イエス・キリストによってお願いいたします。アーメン